

造形的な見方・考え方を働かせ、主体的に鑑賞・表現活動に取り組む授業
～第6学年図画工作「味わってみよう 和のカタチ」の実践から～

山口大学教育学部附属山口小学校 岡崎 典子

(1) 本題材で求める子どもの姿

本題材は、暮らしの中にある「和のカタチ」に触れ、日本の美術のよさや美しさを感じ取る学習である。子どもが、仲間と感じ方や考えを共有しながら、「和のカタチ」の造形的な特徴を捉えられるよう学びを仕組んだ。そうすることで、造形的な見方・考え方を働かせるようになり、主体的に鑑賞活動に取り組むことにつながると考えたからである。また、暮らしの中の「和のカタチ」を鑑賞した高学年での学びが、やがては中学校美術での「日本の美意識」への気付きを生んでいく。このような系統的な指導が、「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わりながら表現する子どもの育成につながるのである。

(2) 学びの実際

① 暮らしの中の「和のカタチ」を鑑賞しよう〔第一次の学び〕

題材の導入では、床の間にある掛け軸の写真を見て、自分たちの暮らしの中にある「和のカタチ」について話し合った。子どもたちは、話し合っていく中で、山や川、鳥や花など自然が多く描かれていることに気付いていった。また、アートカードを仲間分けして、「日本らしい感じ」について話し合い、「色が落ち着いている」「全体の構図がシンプル」といった気付きを共有した。そこで、自分たちの暮らしの中から「和のカタチ」を探してくるよう促した。

第一次第2時では、子どもたちが探してきた「和のカタチ」の写真の中から吟味したものを提示し、仲間分けを行うよう促した。すると、「季節」を視点に子どもたちは仲間分けをし、その理由を話し合った。「赤富士と鶴」の掛け軸を見て、生活経験からお正月を想起した子どももいれば、黄色の雲に注目して秋のイメージだと語った子どももいた。そこで、子どもたちの発言を造形的な特徴を基に板書した。【支援イ】すると、子どもたちは、同じ作品でも色を根拠に、人によって違った見方や感じ方をすることに気付いていった。



「和のカタチ」の写真を見て話し合う子ども

授業の後半、祖母の家で毎月掛け軸を掛け替えているというN児の発言から、「どうして季節によって掛けかえるのか」と問うと、以下のように子どもたちは話した。

I：替えないと、気持ちが・・・目に入って何か違うなって思うし、四季を感じるために掛け替えるのだと思います。

教師：じゃあ、季節に合わせて替えると・・・(U：心が整う)

O：魚が泳いでいる掛け軸を夏に見ると、涼しい気持ちになります。

このように、子どもたちは、季節を視点に、「和のカタチ」を鑑賞し、仲間と感じたことを交流することで、暮らしを楽しく豊かにする「和のカタチ」のよさに気付いていったのである。



第一次第2時の板書

② 「和のカタチ」のよさや美しさを感じながらつくろう〔第二次の学び〕

第二次では、第一次での「和のカタチ」の鑑賞と関連させて表現活動を仕組んだ。【支援ア】O児は、夏の涼しさを表すために、川で泳いでいる魚や水草を描いて、掛け軸にして家に飾ろうとしていた。O児は、「真ん中に余白がある」「魚が3匹泳いで見えるように描きたい」と、美しく見えるような魚の数や位置を何度も試しながら描いていた。



描く魚の数や位置を試行錯誤する子ども

そこで、「形や色などの特徴を基に感じたこと」という観点で学習を振り返るよう促した。【支援ウ】以下は、O児の振り返りである。

色を青、緑などの寒色系にしたのと、魚が川を泳いでいるところから、夏の涼しさが感じられました。日本の絵は、線対称でないので、魚の数を奇数にして「和のカタチ」をつくることができました。

このように、子どもたちは、「和のカタチ」の造形的な特徴を捉えながら、実際に表現してみると、日本の美術のよさや美しさを感じ取っていたのである。

③ つくった「和のカタチ」を鑑賞し合おう〔第三次の学び〕

子どもたちが表現した「和のカタチ」を、鑑賞し合った。【支援ア】冬の和菓子をつくったU児は「冬の美しさを白色と丸い形で表した」という思いを伝えた。このように、表現をとおして気付いた日本の美術のよさや美しさを仲間と交流することで、自分なりの見方や感じ方をさらに深めることができたのである。

(3) 授業の考察

今回、「和のカタチ」を鑑賞し、「四季」を視点に仲間と見方や感じ方を交流することで、子どもたちは、日本の美術のよさに気付くことができた。しかしながら、「和のカタチ」の美しさを共有するまでには至らなかった。まだまだ造形的な特徴を理解することができるような支援が必要だったように思う。今後は、中学校美術との接続も意識しながら考えていきたい。